
究極の黒き闇と究極の白き闇の散歩

漆黒龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

究極の黒き闇と究極の白き闇の散歩

【Nコード】

N0504N

【作者名】

漆黒龍

【あらすじ】

散歩するのは気ままに行くもんだ。この散歩は…まあはじまり以外は気ままか。さて、行くか。リテイクです。チート、ご都合主義、その他MOROMORO。ちなみに内容は作者の自己満足なのであしからず。

序章 前（前書き）

…反省はしている。

だが後悔はしていない。

とぞ。

序章 前

その違和感を感じたのはあの日。

それが目覚めたのはあの瞬間。

それこそが俺を変えたあの夜。

そして…覚悟を決めたあの炎の中。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

ここは人里離れた山奥　雪が降り積もり、凍てつく吹雪が荒れる中。

大気を震わせ、雪など無いが如く大地を焦がし、血飛沫が吹雪を掻き消す。

そこでは…

黒い闇と白い闇が戦っていた。

称号は共に『究極』

故に勝負は拮抗していた。

そして…また違った理由でお互い決定打たる攻撃ができずにいた。

「…まさかあの時の青年がン・ダグバ・ゼバだったなんてな」

「ボクもまさか闇月さんがクウガだったなんて思いもしませんでしたよ…」

究極の黒き闇と究極の白き闇。

二人は少し前に出会っていた。

クウガである夜のバイト先、喫茶店『ぼれぼれ』で。

遡ること数週間前。

快晴のとある平日の昼間、高校生くらいの青年が入店してきた。

聞けば、未確認生命体事件のせいで学校がしばらく休校になったとのこと。

たまたま客がその青年だけだったのもあるが、

青年が飾ってあった夜が旅先で撮った写真に興味を示し、その話をしたところ意気投合。

「ボクも世界中を周って旅するのが夢なんです。

いままで狭い世界にばかりいたので…

こういう写真とかを見るとなんだか損してた気分になってしまって

…」

「ハハ、その気持ちはよくわかるぜ。

んじゃ、将来のために色々と話してしんぜよう。秘密の穴場とかな」

「いいですね、閻月さんの話は面白くて全然飽きないから好きですよ」

「ありがとう、青年！

んじゃ、何処がいい？ちなみにオススメはヴェネツィアだぜ」

「水の都ですよ？いいですね、それでお願いします」

その日は閉店まで色々な話をして笑いあった。

また別の日。

相変わらず客は青年一人。

話の内容はやはり夜の旅の思い出。

一通り聞き終わったところで青年が口を開く。

「闇月さんはグロンギと共存できると思いますか？」

と、こんな話題を言い出した。

このご時勢、聞く人が聞けば真っ向から否定するだろうこの問い。

夜は何故こんな質問をしたのか疑問に思った。

だが疑問に思ったのも一瞬、夜は思っていることを言い出した。

「…俺はできると思う。そう信じている。」

姿・形は違つかもしれないが言葉が通じて考えることが出来るのな

ら、分かり合えるはずだ」

ココだけの話、夜はすでに十四人ほど知っている。

最初は敵として襲い掛かってきたりもしたが、

戦闘中、盛大に腹の虫を鳴らすという偉業をやってみせた者もいた
りした。

まあ、流れてご飯を食べさせてやったら本音をポツポツ言い出して…

「自分…静かに暮らしたかったんすよ。木の実でも食べながら山奥
でひっそりと…」

でも、ゲゲルに参加しろだのクウガ倒せだの…」

てな愚痴を言う奴がほとんどである。

働いてみたい。

と言ったので一条さんに会いに行く。

一条さんに言った時はかなりビックリされたが、実際会って話を聞
いたりしたら快くOKしてくれた。

裏技を使って色々やってくれるそうだ。

うん、やっぱ話せば分かり合える。

そう思った瞬間でもあったわけだが…。

てな回想を数秒で終わらせる。
黙っていた青年が再び口を開く。

「そうですよね…。分かり合えるはずですよね。
…そろそろ帰ります、ごちそうさまでした」

「おう、気をつけて帰れよ」

「大丈夫ですよ、ボクは」

「そうかい…。」

「ま、無理はすんなよ」

そう挨拶をし、青年は去っていった。
それ以来、青年はココに来なくなってしまった。

そして…

再び再会したのは、雪が降る山の中。

- - - - -

てな話をしていた頃が懐かしい。

拳と拳が、蹴りと蹴りが衝突し轟音と共に突風が吹き、衝撃波が雪を遠ざける。

両者とも血を出しながら、反動で地面を滑りながら後退する。

ここで差がでた。

クウガは若干よろけてはいるが、しっかりと立っている。
だが、ダグバは思わず膝を地面に着いてしまっている。

クウガが口を開く。

「…お互い満身創痍だが…正直お前を殺せる自身が無い。
何より、俺と同じ夢を持っている奴を俺は間違っても殺すことはできない」

「…ダメですよ、ボクを殺さないと皆の笑顔を守れないですよ、闇

月さん…いえクウガ」

殺せば終わる。

だがそんな結末を許しはしない。
クウガは言う。

「その皆の中にお前も入っているんだよ、ダグバ」

その言葉を聞いた瞬間、思わず泣きそうになってしまった。
だが、堪える。そして叫ぶ。

「ハハッ…」

それじゃあ駄目なんだよクウガ！！ボクを殺さないとダメなんだよ！
終わらないんだよ、殺戮は…このゲゲルは！！！！」

「……………」

その叫びをクウガは黙って聞いた。
その魂の慟哭を。
その心の悲しみを。

「さあ！戦うんだ！闘うんだよ！！
ボクが勝てば全てを殺す！クウガ、貴様が勝てば笑顔が守られる！
これは変えることのできない運命だ！
この宿命からは逃れられない！！！」

「…なめるなよ、ダグバ。」

今現在のお互いブチ当てている殺気。

口を開いた瞬間、

上限だと思っていたクウガの殺気がとてつもないモノになり、ダグバの全身を震え上がらせる。

「（な！？いくらクウガとはいえ人間にこんな殺気が出せるのか！？
…闇月さん、あなたは本当に…人間なのか？）」

思わず身が後退してしまうダグバ。
だがそんなこと関係無くクウガは言葉を放つ。

「ざけんな。

こんな運命ごときを受け入れるな。そんな宿命などクソ喰らえだ。
お前には…変えるだけの力があるはずだ」

「…無理ですよ、そんなこと」

そう、全ての元凶はボクだ。

ボクがいなければこんな絶望は広がらなかった。
ボクがいなければ笑顔を絶やすことはなかった。

だが、クウガがそれを斬る。

「違う。別の奴が頂点だったのならこの絶望は計り知れないモノに
なっていただろう。

だがお前は違う。このゲゲルを止めようとしてたじゃないか。

それに…グロンギに襲われている少年を助けたそうじゃないか。感
謝してたぞ、お前に。

まあ、それに俺以外はお前の人間の姿知らないからしらばっくれる
こともできるしな」

「な!？」

訳が分からない。

この人は何を考えているんだ!？

「言っ たろう？」

皆の笑顔を守りたい、その皆の中にお前も入ってる…と」

その言葉を聞き、ダグバは理解した。

ああ、この人は馬鹿なんだな…と。

「フ…」

馬鹿なんですね、闇月さんは」

「あん？馬鹿とは失礼な」

ほんと、大馬鹿ですよ。

ボクなんか助けて…

嬉しくて涙が出てくるじゃないですか。

「ククっ、…ほれ、帰るぞ。

どうせ一人なんだから俺が相棒にでもなっ てやるよ」

すでに殺気も闘気もゼロ。

言いながら変身も解くクウガ。

もはや戦う気などない。

苦笑いしながらもダグバも人間体に戻る。

「…ありがとうございます」

どうしよもない人だ。

まったく…

あんまり優しくされると涙が出ちゃうじゃないですか…。

「んん？」

おいおい、泣いてんのか？

男は人前で泣くもんじゃないぜ？」

「うるさいですよ、闇月さん」

「あ？うるせえだと？大体なあ……」

ハハッ、こんな笑いあつて話すのはあの時以来だな。
ほんと…悪くないな。こういうのも。

あ、そうだ。あの喫茶店『ぽれぽれ』で働かせてもらおう。

そんなことを考えながら帰ろうとした時、奴は来た。

「ダメじゃないか、クウガは殺さないと」

「「!!」」

強烈な殺気が二人を襲う。

声のした方を見る。

空間が歪み、そこからダグバとこの世界では倒したはずのグロンギ
数対が共に現れる。

「やあ、この世界のクウガ。キミを殺しにきたよ。

この世界のボクの行動はあまりにも見ていられなくてね、つい来ちゃったよ」

夜は戦闘態勢をとりながら一つの疑問を抱いていた。

おかしい。

こつも簡単に世界の壁を越えて来れる筈が無い。（DCD達は別だが…）

むこうにも俺と同じクウガがいる筈だ。

どうやって来れた？

何者かが邪魔をした？ 可能性としては五分五分か…。

ならば協力者…大シヨッカーの残党あたりか？

だが、それならば他のライダーも応援に来る筈。

…考えたくはないが…まさか、

「…貴様の世界のクウガはどうした」

「ああ、彼ね。彼は自滅したよ」

自滅だと！？

どういうことだ！？

「…考えられんな」

「まあ、メンドクサイけど簡単に説明してあげるよ。

何番目か知らないけど戦っている時にね、幼稚園だっけ？小学校だったような気もするけど…

いいや、ともかく戦火が拡大しちゃってね。そこを丸ごと炎に包んじゃったらしいんだよ。

それで周りからの声や戦鬨に耐え切れなくなって自殺したらしいよ？アハハ、笑っちゃうよねえ、まったく。

あ、ちなみにこっちのリント…人間はもういないんじゃないかな？」

「なんだと！？」

「思ってたより抵抗が激しくてちよつと数は減っちゃったけど、皆殺しにしてやったんだよ」

「な！？」

この世界のダグバに戦慄が走った。

同じン・ダグバ・ゼバという存在でも世界が違つとここまで違つのか！？

姿・形は同じだが、中身が根本から違つ。

自分とは正反対の同じ存在…。

まあ、共存を昔から唱えているこの世界のダグバも異常っちゃあ異常なのだが…

「……………」

一方、夜はむこうのダグバの言葉の内容が信じられなかった。

だが…やはりそういう世界もあるということなんだろう。
ほぼ同じ道を辿っていたとしてもこっちの世界はハッピーエンドなのに

向こうの世界はバッドエンドなんてのもザラにある。

とはいえ、この世界にその絶望を広めさせる訳にはいかない。

笑顔を護ってみせる。

故に、我が全力を持って貴様らを消し去ってみせようぞ。

「そうか…

ならばその絶望、この世界に広める訳にはいかない。

笑顔のために…

我が闇を持って貴様らを消し去ってみせる。」

腰に手をかざし、ベルト・アークルを再び出現させる。
霊石・アマダムが意思に応えるように輝き、鼓動する。

「…ボクも手伝いますよ、闇月さん。」

夜の横に並び、ダグバも変身しようとする。

「…いいのか？」

「ええ、彼等は違います。僕達とは。だから遠慮はしません。」

「…わかった」

雄たけびが上がる。

どうやらむこうのグロンギ達はもう、我慢の限界のようだ。

むこうのダグバが口を開く。

「君も逆らうのかい？」

…わかった、ならクウガ共々消えて無くなってくれよ」

それを合図と見たか、周りのグロンギ達が一斉に襲い掛かる。その数60体。

「アレ、ボクも言いますよ」

「…いいね、ダブルライダーと洒落込もうじゃないか」

それに怯むことなく、二人は告げる。

「残念だが、消え去るのは貴様らだ。
我が漆黒の闇によって」

「悪いけど、消えてもらおうよ。
ボクの白き闇で」

「「変身」」

さあ
…勝負だ。

序章 前（後書き）

もう一度言う。

後悔はしていない。

次回、序章 後 簡単に言つと蹂躪タイム。

序章 後（前書き）

暑いよ。

なんだってんだよまったく。

あ、猛者はもうじやって読むんだぞ。

では、どぞ。

序章 後

異形：グロンギ達の咆哮が世界を振るわせる。

60体のも死の化身ともいえる存在がたった二人の戦士に向かう。

しかし、二人は恐れもせずその行動を行う。

鏡に写したかのように正反対の同じポーズをとる。

そして告げる。

その言葉を。

「「変身」」

一方は黒く輝き、一方は白く煌く。

二人を中心に雷が走り、突風が吹き荒る。

そして光りが一層強まり、副産物の衝撃波が目と鼻の先まで来ていたグロンギ達を吹き飛ばす。

そして、再び現れる二つの『究極』。
黒き闇と白き闇。

さて、ここで簡単な話をしよう。

質は量には勝てない。

これは古今東西、変わらない考えである。

無論人間同士、異形同士でも基本的にはそれは変わらない。

それがおよその常識なのだが…

常識外のこの二人には60体は少な過ぎたようだ。

それは一方的な蹂躪だった。

起き上がり、再びグロンギ達は二人に向かうが突然体が動かなくなり。ピタリと止まる。

グロンギ達は理解ができず、無理やり体を動かそうとするが動けない。

そして一気に20体ほどが紅蓮の炎に包まれ、一瞬で灰になった。

どうにか目を動かし、白き闇…ダグバが手を掲げているのが見えた。

そして理解した、だが理解した瞬間自分も炎に包まれ苦しむ暇も無く灰になった。

そしてつまらなそうに呟いた。

「…なんだい？ 呆気ないね」

次に見たのは黒き闇…クウガの周りにいきなり黒い剣群が30程現れる。

それが常識を超えた速度、たとえ体が動いても間違ひなく避けられない速度で放たれ、

瞬きをする暇も無く残っていた全てのグロンギのベルト部分に突き刺さる。

苦しむ声を上げようとしたがそれも虚しく、クウガからその言葉が放たれる。

「爆ぜろ」

その言葉と同時に突き刺さる全ての剣が光り、グロンギ共々大爆発を起こし消し去った。

だが、爆風の中からたまたま残ったのであろう三体が飛び出し、ク

ウガを襲う。

その内二体…一体が突進、一体が空中に飛び上がり同時に迫り来る。

クウガは右肘の刃を伸ばし、エネルギーを纏わせる。

同時に両足に力を籠める。

「オオオオオオ……… オウアア!!」

蹴られた地面の雪が柱の如く舞い上がる。

クウガは地面スレスレの低い体勢で目に映らないほどの速さをもつて、

突進してきたグロンギに肉迫する。

「!!」

「麒麟・極!!!」

そして右肘の刃で地上のグロンギを股間から脳天まで真っ二つに斬り裂き、

そのまま迫っていた空中のグロンギも同じように真っ二つに斬った。

そのままクウガは空中で反転し、何も無い空間を、蹴り、最後の一

体にキックを放つ。

先ほど地面を蹴り、突進した時以上の早さでのキックはグロンギを貫き、

大地に100mはあろう巨大なクレーターを穿ち、止まった。

そして、轟音と共に天に紅蓮の柱が昇る。

この攻防…と言っているのか、僅か三分。
五分も経たないうちに、むこうの世界では全て滅ぼしたグロンギの
猛者達が消え去った。

「…ば、馬鹿な。」

向こうの世界のダグバは信じられなかった。

駒のようにしか扱ってないとはいえ、世界を相手に戦い抜いた猛者
達をこうも簡単に…。

コチラの二人は大した苦勞もせず、打ち倒してしまった。

だがこちらでもグロンギの頂点ン・ダグバ・ゼバ。

そう易々とやられはしない。

「ハハッ、凄いね君達は。」

「手応え無さすぎだろ」

「…そうですね、

こちらのゲゲルを抜けて働いている彼らの方が下手したら強いかもしれないね」

「!!!」

そう、言っちゃあなんだがあまり強くなかった。

夜の方はアルティメットにならなくてもよかったんじゃない？
と心の底から思っていた。

「…まあ、そう言っていていられるのも今の内だよ。
さあ、殺してあげるよ。」

クウガが前に出ようとするが、ダグバの手により止められる。
そして言う。

「…ボクがやります。」

「いいのか？ 仮にも同じ存在だぞ」

「…だからこそです。」

同じ存在だからこそ、ボクが倒します」

「わかった」

「…ありがとうございます」

奴を見た瞬間、覚悟は決めていた。

ダグバが前に出る。

クウガは数歩下がり、戦いを見守ることにした。

多少の距離を挟み向かい合う二体のン・ダグバ・ゼバ。

「いいのかい？ 二人で来なくて」

「…貴様を倒す程度、ボクだけで十二分ですよ」

「大した自信だね？」

彼にやられたダメージが残ったままで僕に勝てると思っているのか
い？」

「…貴様を倒すには全く問題ないよ」

「へえ、ならば後悔しながら死にな。
ハアア！！」

そう言うな否や、飛び掛りパンチを繰り出す向こうの世界のダグバ。
ダグバそれを屈んで避けるが、向こうのダグバの膝が迫る。
だが焦ること無く、右拳で太股を殴り無理やり方向を変える。

「クウ…！」

内側に近い所を殴られたため、向こうの世界のダグバは思わず苦悶の声を発する。

だが、その僅かな隙を見逃し、待つてやるほどダグバは馬鹿じゃない。

そのまま、すくい上げるように左拳でアッパーを放つ。

「ハッ！！」

アップーは見事に向こうの世界のダグバの顎を捉え、そのまま体を浮かす。

そしてダグバは告げる。

「……！」

「……終わりだ」

エネルギーを籠めた両拳を向こうの世界のダグバの顔面とベルトに同時に放つ。

右拳は顔面を左拳はベルトを正確に捉え向こうの世界のダグバを貫く。

それを受けた向こうの世界のダグバは、きりもみ状になり、十数回ほど地面をバウンドするほど吹き飛ばされ木を数十本なぎ倒し、やっと止まる。

「……」

ダグバは黙ってその様子を見ている。

決定的な一撃を入れた、だが油断はできない仮にも同じ存在なのだから。

「ぐ…グボア…ア…」

口から大量の血を吐き、
ベルトを破壊されても尚どうにか立ち上がろうとする向こうの世界のダグバ。

止めを刺そうと近寄るダグバ。
その後ろを一定の距離を保ちながら着いて行くクウガ。

そして、どうにか立ち上がった向こうの世界のダグバの目の前で
到着。
ダグバが口を開く。

「覚悟はいいですか」

「グフウ…まさか…ここまで、力の差が…あるとは」

「…」

無言でエネルギーを籠めた拳を振り上げる。そして、それをベルトに叩き込んだ。

ピキピキという音と共にベルト全体にヒビが入り、隙間から光りが覗く。

そして…

[illegible]

断末魔の叫びと共に、天に昇る火柱と化した。

「……終わりました」

「ああ、そうだな」

「ん？」

ダグバが地面の何かに気づき、それを拾い上げる。

「なんだそりゃ？」

「…なんでしょう？」

さっきまでは無かったはずなんですが…」

「赤い…宝石か？」

「…みたいですネ。」

さっきの一撃の時に土の中からたまたま舞い上がったんですかね」

「ふむ…」

まあ、それが一番妥当だろう。」

そついい終わると同時にその赤い宝石が突如光り出す。

「なにッ!？」

「…これは!!」

ダグバは嫌な予感がし、その宝石を放り投げる。

しかし宝石は突如空中で浮き止まり、光りをより一層強める。

「うお!？」

「なんだか知らんがヤバそうだ!！」

「…みたいですね。

逃げましょうか」

「だな。

来おい!！」

エンジン音が響き渡り、ライジングビートゴウラムが猛スピードで向かってくる。

だが、あと一瞬。

あと一瞬早く決断していればこのまま居れただろう。

赤い宝石を中心にブラックホールのような空間が広がる。

今まさにバイクの後ろに乗ろうとした瞬間、ダグバに突然の浮遊感が襲う。

「…しまッ!！」

「なにッ！？ダグバッ！！」

咄嗟に手を伸ばすが一瞬の差で届かず、ダグバはその空間に吸い込まれてしまった。

クウガは迷う事無く、ライジングビートゴウラムを反転させその空間に突っ込む。

「オオオオオッ！！！」

しかし空間に入った瞬間、特に何の手応えもなかったのも、そのままの勢いで高速回転しながら落ちていった。

「オオオ…！？」

そして二人の戦士はこの世界から消えた。

赤い宝石は役目を終えたかのようにその姿を消した。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

そして…

「…ウウ」

「クッ…」

若干の痛みはあるが大した事はない。

見れば、ダグバもビートチェイサーもゴウラムも無事なようだ。

周りを見回す。

月が出ているな。夜だな。

場所はある程度高い…ビルの屋上か？

そして何より目を引いたのは…

「城？

随分デカイな（俺が知らないだど？）」

「…そうだね」

「気がついたか」

「…ええ。

多少痛みますが問題無いです」

「…世界中を周ってきたんだが…」

「…いきなりどうしたんですか？」

「俺はこの場所を知らない。
あの城も全く見覚えなし」

「…え？
闇月さん、それって…」

その答えを聞こうとした時、
かなりの規模の爆発音が響き、街が紅に染まる。

「なに！？」

「…あれは…」

眼下、街を炎に包んでいる原因が目に写る。

十数mはあろう巨大な怪物が暴れていたのだ。

市民達は逃げ惑っている。

「あのままじゃ…、奴らを止めるぞ」

「…ボクもそう思っていたところです、闇月さん」

夜はビートチェイサーに跨り、ダグバはゴウラムに乗る。

「行くぜッ!!」

「…了解」

二人は、異世界の炎燃え盛る街へ。

二人の戦士はヴィントブルームに降り立った。

序章 後（後書き）

終わりが微妙だ。

PSPで仮面ライダーのゲーム出してほしい。
できればアクションで。

次回 タイトル未定 スレイブ蹂躞予定。

設定 クウガ

26日追加（前書き）

クウガ編。

ヤミツキ ヨル

と読みます。

設定 クウガ 26日追加

名前

闇月 夜

性別

男

年齢

21?

身長

192cm

体重

82kg

容姿

黒髪、黒眼。

髪は腰よりちょい上まで伸ばしている。

顔は上の下。

性格

気楽、気まま、気の向くままがモットー。
命を粗末にする奴は許さない。

能力

不老不死

実は異世界の人間。
不慮の事故で世界の壁を越え、仮面ライダーになった男。
年齢は万を超えていたりする。
親しい間柄にも秘密。

仮面ライダークウガ

見た目はS・I・Cのクウガをもう少し筋肉質にした感じ。
結構凶悪な見た目になる。

マフラーも巻いている。

勿論フォームチェンジで色も変わる。

スペックもかなり上がっている。

もともとのスペックに0を一個足してもらえればいい。

(そうするとアルティメットがとんでもないことになる。チートだから気にしな(ry)

他のクウガと違う点。

ボウガン型のペガサスボウガンは弓型のペガサスボウに。

■■■■■フォーム

究極の闇を超えし、真なる闇の姿。
スペックはさらに跳ね上がる。

能力

基本的には変わらない。

原子・分子操作能力を独自の応用・訓練で作り上げた能力が一つある。

武器を自分の周りに作り出し射出することが可能。

アルティメットで使用可能、最大30本まで。

■ ■ ■ ■ ■では五十まで。

同時生成、同時射出が可能。

ゴウラム

別名『馬の鎧』

クウガの支援メk（ry

呼べば何処からともなく来ます。

夜はカッコよく『鉄馬の鎧』と呼んでいる。

専用マシン

ビートチェイサー2000

最高時速420km/h

ほぼ完璧に壊れたので新たに製作。

Y A I B A

最高時速 6 2 0 k m / h

ゴウラム装着時 9 4 0 k m / h

ライジング時 1 3 6 0 k m / h

外観は S U Z U K I G S X - 7 5 0 S 3 K A T A N A

ボディは黒、フレームは赤、文字は青。

設定 クウガ 26日追加（後書き）

続けてダグバ編へ。

設定 ダグバ

26日追加（前書き）

ダグバ編です。

設定 ダグバ 26日追加

名前

ン・ダグバ・ゼバ

人間の時の名前

東 白金

年齢

???

身長

人間体 184cm

戦闘体 205cm

体重

???

容姿

銀髪、翠眼。

髪の長さは普通。

顔は上の中。

性格

本来は心優しい性格。

リントとの共存を唱えているが昔は一部のリントの裏切りに合い失敗。

復活し、やっとこさこっそりではあるがこっそり共存成功。

これを気に自分が元凶だと言い、

殺されれば解決するという計画だったがお人好しのせいで失敗、だが結果的に良かったみたいだ。

リント：人間の文化や風習に深い興味を抱いている。

特に建築物と絵。

写真が好きだがカメラが無い。

こっそり働いていた時もあったらしいが文化知識の無さで二日でクビになった。

能力

夜が変身するクウガ・アルティメットフォームと同等のスペック、能力を誇る。

原子・分子操作ではダグバの方が上。

何気に天候も操れる。

自分専用の剣、槍、ボウガンを作り出すことも可能。

専用マシン

マシン・ゼバ

最高速度 835 km/h

モーフイング・パワーにより普通車から変化させる。
ダグバと同じく、白亜の装甲に金の装飾のマシン。

外観は Y A M A H A V - M A X

設定 ダグバ 26日追加(後書き)

名前決定。

マシン決定。

変えたほうがいいんじゃない？
てな意見あれば聞きます。

燃える街の中で（前書き）

おかしいだろ、この暑さ。

高気圧がなんたらかんたら…らしいが。

PSPゲームでも物色に行くかなあ…。
シュミレーションあたりを。

…どうぞ。

燃える街の中で

ヴィンドブルーム王国 風華宮 城下

街の至るところから炎が上がり、人々は巨大な怪物から逃げ惑っていた。

ある者は怪我を負いながらも少しでも安全な場所を探し逃げ、ある者は家を焼かれ、その場に座り込み呆然と燃える家を見続け、ある者は怪物の攻撃で瓦礫の下敷きになった者を救おうと努力し、ある者はもう終わりだと呟き、死を覚悟していた。

「ママーッ！ママーッ！」

そこでは小さな女の子が瓦礫の下敷きになった母親を必死に助け出そうとしていた。

女の子の手は至るところが傷を負い、血が出ているがその小さな手で瓦礫をどかそうとしている。

「キョウカ…逃げなさい。ママのことはいいから、…早く」

「やだよう！ママを置いてなんか行けないよお」

「お願い…いい子だから」

「やだやだやだあ！！…あ」

必死しなつて母親を助けようとしていたから、
お別れなんてしたくないから、
もつと甘えたいから。

だから気がつかなかった。
気づけなかった。

そう…すぐ傍まで怪物が迫っていることなど。

パツ…と急に辺りが暗くなつたと思い、顔を上げる。

「あ…ああ…」

「キョウカツ！逃げなさいッ！！早くう！！！！」

母親の叫びは届かない。

鋭い牙を見てしまったから
光る爪を見てしまったから
その目を見てしまったから

恐怖が支配した。

怪物は腕を振り上げる。
その鋭い爪がギリリと光る。

「ッ!!」

母親は自分の娘を手を引つ張り引き寄せる。
下半身の殆どが瓦礫に埋まってしまっているが最愛の娘を守るに抱く。

せめてこの子だけは。

だがあの巨大な腕が振り下ろされれば跡形も無く死ぬだろう。

そんなことは判っている。

判っているけど…。

だが、無慈悲にも腕は振り下ろされた。

死を覚悟し、目を瞑る。

「……………」

しかしいつまで経っても衝撃が来ない。

おかしいと思い、恐る恐る目を開ける。
するとそこには…

「え…」

「無事か？」

待ってる、コイツを片付けてからどかしてやるから「

彼は…

何十倍もある体格差など無意味な如く、

何十倍もある腕を受け止めていた。

金色に輝く角を光らせ、

真紅のマフラーを揺らし、

燃え盛る炎の中でもはつきりと判る程の紅蓮の鎧を身に纏い、
ツリ上がっているが火のような暖かい眼差しを感じる複眼の…

「ハアッ！！」

ヒーローがいた。

- - - - -

「ハアッ！！」

「グルア!？」

クウガは怪物の腕を掴み、その親子から離すようにブン投げる。
怪物…スレイブは回転しながら広い道路の方へ飛んでいった。

「じつとしてろ」

「は、はい」

クウガは大人の男数人でもビクともしなそうな瓦礫を軽々と持ち上げ母親を救い出す。
見れば、擦り傷や切り傷はあるものの幸い大きな怪我はない。

「立てるか？」

「あ、はい。大丈夫です」

「君も。大丈夫？」

「うん…ありがとう、お兄ちゃん？」

母親は多少ふらついたが問題無く立つ。
女の子の方はクウガにお礼を言うが首を傾げる。

「フ…、お兄ちゃんて合ってるぜ」

そう言い、女の子の頭を撫でる。
女の子は気持ち良さそうに目を細める。

しかし、その時間は長くは続かなかった。
爆発音と共にスレイブが咆哮を上げる。

「グルオオオオオオ！！！」

「おっと、どうやら俺をご指名らしい。
さ、早く逃げるんだ。道の瓦礫は来る途中にあらかた片付けておいたから」

「あ、ありがとうございますっ」

「お兄ちゃん、助けてくれてありがとう。
あ、兄いちゃん名前は？」

「クウガ、仮面ライダークウガだ」

「クウガお兄ちゃんだねっ。」

わたしはキョウカだよ」

「ハハッ、キョウカちゃんか。」

おっと、早く逃げるんだ」

「はい、ありがとうございます」

「うんっ」

親子は走ってこの場を後にした。

振り返ればスレイブがこちらに向かって走り出していた。

「さて…悪いがパツパと退場してもらっぜ」

「オオオオオオ！！！！」

スレイブはその爪でクウガを引き裂くため腕を振るっ。

しかしクウガは踏み込み、その腕が振り下ろされるより早くスレイ

ブに肉迫する。

「フツ！ハツ！！オレヤアツ！！！」

「グルアアツ！？」

スレイブの腹にワンツ―を叩き込み、最後に蹴り上げその巨体を浮かす。

その痛みにスレイブは苦悶の声を上げる。

「街の被害は最小限にしたいんでな、お前にも空の旅をしてもらうぜッ！！」

若干浮いているスレイブの腕を掴み…

「いくぜ、本郷さん直伝ッ！

ライダアアアきりもみシユウウトオオオオオッ！！！！」

クウガはスレイブの巨体を自身の頭上まで持ち上げ、その巨体をお手玉の如く、真空状態を作り出すほどの高速回転をあたえる。

その回転は凄まじく、竜巻を生み辺りの炎も一緒に巻き上げ紅蓮の竜巻となりながら、スレイブを遥か上空に投げ飛ばした。

そしてクウガは右足にエネルギーを貯め…

「トウアッ!!」

空中に投げ出されたスレイブに向け、マイティキックを放つ。

「ハアアアアッ!!!」

天に昇る紅蓮の流星が如く。スレイブを貫き、爆散させた。

クウガはそのまま重力に身を任せ、近くのビルの屋上に降りる。

するとそこにゴウラムに乗ったダグバが飛んできた。

「闇月さん」

「ダグバか。」

逃げ遅れた人は全員、無事に助け出したぜ。そっちは？」

「…ボクの方も多少怪我をしている人もいましたけど、無事に助け出しました」

「だが…問題は」

「…あそこ、ですね」

二人が見据える先…

そこには城…風華宮の周りにバリケードを築き封鎖し、避難してきた市民達を入れさせまいと銃を向ける軍と警察の姿があった。

「まずいな…」

あのままじゃ暴徒と化して最悪、死人が出るぞ。つてもなあ…」

この世界の上の連中は馬鹿か？

市民の避難を最優先させないでどうするんだよ。

自分達の安全が第一か！？

まったく、とんだクソ共だな。

どうも頭に血が上って良い手が浮かばん。

ダグバ、なんかないか？

て聞くが…

「…良い手が浮かびませんね」

同じみたいだ。

無策に出て行ったらさらに場を混乱させるだけだし。

かといってバリケードを壊したら市民達が雪崩れ込んで最悪死人が出る。

だがあまりモタモタしていると何時、怪物共が来るか分からない。

軍・警察の攻撃手段を二人の原子・分子能力で封じる。

てな手もあるが、そうなると武器のなくなった軍・警察を見て市民達が何をしだすかわからん。

市民達に手を出すわけにはいかない。

完全に手詰まりである。

だが、とりあえず…

「街の火を少しでも消すか？」

「…今んとこボクもそれ以外良い考えが浮かびませんね」

膝を着いた状態から立ち上がり、

クウガはマイティフォームのままもう一回変身のポーズをとる。

だがアルティメットに変身しようとした瞬間、

ビルの上からでも、その声ははっきりと聞こえた。

「道を開ける！！」

「！？」

「…？」

混乱の中、突如響く声。

先ほどまであれほど騒がしかった場が嘘のように静まり返る。

軍用車のライトが声の発生主を捉える。

「何者だ！？」

指揮官らしき男が声を上げる。

だが、彼女 は凜とした声で答える。

「この顔を見忘れたか！？」

銀に光る長い髪が風に揺れる。
白亜のコートがその存在を示す。

「ボクはヴィントブルーム王国 第一王位継承者」

その姿を見て、
その言葉を聞き、

指揮官含め、軍・警察の全ての顔色が変わる。

「マシロ・ブラン・ド・ヴィントブルームなるぞ……！」

「マ、マシロ姫様……！」

軍・警察、市民関係無く、文字通りぎよっとする。

「直ちに城門を開き、避難民を王宮に收容しなさい……！」

「……はっ……！」

「これより全ての指揮はボクが執る……！」

その姿は凛々しく、

その声は威厳に満ちていて、

その瞳は揺ぎ無い決意に染まり、

その姿は……

「反撃に出るぞー!!」

…王だった。

- - - - -

その様子を屋上から見ていたクウガ、ダグバの二人は…

「ほう、ちつこいくせにやるじゃねえか」

「…まあまあですね」

「お？」

厳しい評価だねえ、王様」

「…ボクは王ではありません。
ただ、戦いで戦いの頂点に立ったに過ぎません。
王らしい事など何もやってませんよ」

「それでもないと思うがな。」

少なくとも今共存して、暮らしている奴らはお前が王でよかった…
って言ってたぜ？」

「……………」

ボクは以外と涙腺が弱いのかもしれないな。
嬉し泣きしそうですよ…。

「さて、と…。

しんみりしてる暇はないぜ？」

「…そうですね。

恐らくあそこに…」

「この事件の首謀者がいる…はず」

見つめる先、

そこには今までのスレイブより二倍近い巨躯を誇るスレイブが五体、
二人が既に何十体か倒したのと同型のスレイブ三体が街を破壊して
いた。

「…十中八九あそこでしょうね」

「だな。」

お、あの姫さんも向かうみたいだぞ」

「…ボク達もいきますか」

「おうよ」

クウガはビルから飛び降り、停めてあるビートチェイサーにそのまま乗り、走り出す。

ダグバは再度ゴウラムに乗り、能力で火を消しながら後を追う。

乙・HiME達との出会いまであと僅か。

燃える街の中で（後書き）

グダグダや。

文才マジで欲しいわ。

次回 会って…どうしようか。

戦って 戦って 疲れて(前書き)

ポケモンブラックに金を使うか…

G O D E A T E R Bに使うか…

それとも中古で売ってたARIAのDVD BOXを買うか…

迷うな…。

どっぞ。

戦って 戦って 疲れて

先ほどとは打って変わって軍・市警の動きが変わったのをビルの上から見て、
今回の事件のリーダー、パーフェクト・サイボーグ完全義体ラドは思わず声を出してしまっていた。

「市警の動きが変わった!?!」

「…ココの姫様のおかげですね」

「!?!」

聞こえるはずのない声を聞き、ラドは驚愕するがそんな暇も無く白い影が迫る。

「シッ!?!」

「ツク!?!」

ガガ!ズガガガガ! ギイン!!

地上で数撃、そのまま空中に飛び上がり数十連撃。
最後に弾き合い、お互いビルの両端に降り立つ。

ラドが警戒しながら声を掛ける。

「ク……………何者だ」

動きが止まり、初めてその全貌を見る。

金色の角。

万物に恐怖を与える漆黒の目。

白亜の装甲の上に金の装飾を施した鎧。

触れるモノ全てを切り裂くと思わせる刃が両腕、両足から出ている。
武器は白い柄に金色の矛がついた槍。

一瞬自分と同じパーフェクト・サイボーグ完全義体か？
と思っただがあきらかに違う。

アレは生物だ。

僅かな時間、思考の海に入っていたがその異形の声で考えを現実に戻す。

「…ン・ダグバ・ゼバ」

「ダグバ…？」

「…究極の白き闇です」

訳が分からない。

一樣、名前のようだが近隣の国でも聞かない名前も言い方だ…。

「…どういう意味だ？」

「…そのままの意味ですよ。

それより…なぜこんな事をしたんですか？」

会ったら、一番聞きたかったことをダグバは聞いた。

何故ここまでする必要があるのか。

そこにある幸せを奪っていい訳が無い。

「我らの悲願、革命のため。

そしてなにより、我が正義のため」

「…今、そこで幸せに暮らしている人達を巻き込んで…ですか？」

「何も知らぬ者が言うなッ！

腐敗したこの王国を、この世界を！！」

「…詳しくは知りません。ココに来たばかりなので…

でも、何の罪も無い人々から笑顔を奪い、涙を流させた。

アナタ達はやり方を間違えた。

だから、ボクはアナ達を許しません。」

そう言い、槍を構え直す。

ラドの方も刀を構える。

僅かな静寂

それを破ったのは爆発音

同時に二人は斬り結ぶ。

「シッ！！」

「ハア！！」

- - - - -

時を同じくして、ダグバとラドが戦っているビルから少し離れた所。

マシロ、アリカ、ニナがラド同様、

パーフェクト・サイボーグ
完全義体ルーメンとの戦が決着が着きつつあった。

蒼天のマイスターローブを纏ったニナの必殺の一撃がスレイブに叩き込まれる。

「はっ、そんな攻撃が革命的装甲《レボリユ・シヨナル・アーマー》に効くものですか！！

ロベスピエール、もう一撃よ！！」

「無理よ

あなたの心臓ハートは既にボロボロ！！」

ポコッ！ ピシッ！！

と何かが膨れる音とヒビが入るような音が聞こえた。

その音を聞き、ルーメンは何かに気付く。

パーフェクト・サイボーグ

完全義体となった者は戦闘力をはじめ、

その他の感覚器官も常人よりはるかに優れたモノとなっている。

故に、その音を聞いた瞬間に理解してしまった。

その音は何なのかを。

そしてこの後起こる事を。

自分の末路を。

「！！」

ま、まさか…内側から衝撃を！？」

ハート型にへこんだところから徐々にスレイブの全身に亀裂が広がり、光りが漏れる。

そして、その技が炸裂する。

アルティメット・ハートフレイク

究極傷心掌破！！！！

「バ…バ力なあ…」

スレイブが敗れ、術者であるルーメンの体が崩壊を始める。

「ニナちゃん!!」

同時に、ニナも体力を使い果たし倒れこむ。
マシロは慌てながらもしっかりと受け止めた。

同志の仇、何よりマシロ姫を抹殺できる絶好のこの機会を見逃す筈が無い。

それを好機と見るや残りの者達がスレイブに指示を出す。

「オトメが倒れた今、マシロ姫を守る者はいない!!
殺れっ！我が僕よ!!!!」

「キシヤアアア!!」

ロベスピエールと同型のスレイブ三体が一斉に襲い掛かる。

「くう……」

「マシロ……様……逃げ、て……」

「うう……マシロ、ちゃん……」

状況絶望的。

二ナ、アリカ二人とも先ほどの戦闘で力を使い果たして立つこともできない。

だからと言って自分にスレイブ三体を倒せる程の力はない。

そんなことを考えている内に三体のスレイブが迫る。

「くそう……結局ダメじゃないか……」

結局何もできないじゃないか……くそう」

先頭のスレイブが目の前まで到達し、その腕を振り下ろす。

「ッ……!」

マシロ、二ナ、アリカの三人は死を覚悟した。

だが、その覚悟は露と消える。

ウオオオオオオン！！！！

大気を振るわせる爆音が響いた。

「「「！！！！」」」

それは猛スピードでマシロ達の横を通り過ぎ、
一瞬、動きを止めていたスレイブを吹き飛ばした。

バキィ！！！！

「キシヤアアアア！？」

「！！！！」

「!？」

残りの二体も巻き込み地面に激突、
地震が起こったと錯覚するくらい大地が揺れた。

「なッ!？」

ク…何者だ!?!」

「あ…」

その人は見たことも無いバイクに跨り、
ボク達を守るように立っていた。

その人がこちらを向く。

ツリ上がった赤い複眼が一瞬怖いと思ったが、
発せられた声によってそんなモノは消えた。

「無事だな、三人とも頑張った。
…少し待っている、すぐ片付ける」

「え…あ、はい」

「じつとしてるよ」

そう言つてボク達の頭を撫で、シュバルツの方に向き直つた。

男が怒鳴り散らす。

「貴様あ…何者だと聞いているんだッ!!」

「仮面ライダークウガ」

「カメン…ライダーだあ？」

「一つ聞きたい、なぜ罪も無い人々を巻き込んだ」

「ハッ、いきなりしゃしゃり出てきた貴様に教える舌は無いんでな
あ！」

「ほら行けよお、我が僕!!!」

いつのまにか起き上がった三体のスレイブが襲い掛かってきた。

右から一体、直線状に重なって残りの二体が迫る。

クウガはまず落ちていた長めの鉄パイプを真上に蹴った。
そして叫んだ。

「超変身!!」

叫んだ瞬間、クウガの体が青く光ると同時に雷が走る。

光りが収まる。

すると先ほどの紅蓮の鎧ではなく、金に縁取られた流水の如き青い目と鎧に変わっていた。

「なッ!!」

「変わった!？」

そして丁度落ちてきた鉄パイプを掴む。

あんな鉄パイプで何をするんだろう？

と、思っていると今度は鉄パイプがその姿を金色の矛の青い双刃槍ダブルブレードへと変えた。

そしてクウガは双刃槍ダブルブレードを構え、

残像が残る程の脅威のスピードでスレイブの股下を通り抜けた。

「フッ！」

普通の一般人が見ればいきなり消えたと思うだろう速さで。

ズザザザザン！！！！

数回の斬撃音の後、少し遅れて地響きが聞こえた。

マシロは何が起こったか判らず、音のした方…スレイブを見る。
そこで初めて音の原因を始めて理解した。

そこには足が斬られて、地に伏しているスレイブ二体の姿。

「なんだと！？」

術者は信じられない様子で、声が大きくなり裏返ってしまった。
そんなものはお構いなしに、

クウガは向き直りながらエネルギーを槍に溜め、地面を蹴り、手前のスレイブに肉迫する。

ドラゴン・ロッド
双刃槍を腹にブツ刺し上空に放り投げる。

二体目も同様にして放り投げる。

「オオウアッ！！」

猛スピードで数百m上空まで上昇し、爆発する。

「汚ねえ花火だ。」

ズガガガガガアーン！！

つつおう」

聞こえる様に言う。

決まった...と思っていたら関係無く最後の一体のスレイブがミサイルを雨のように撃ってきた。

「ッチ。」

この弾幕は余裕で避けれるが青だとキツイな…
紫でいくか。」

動きを止め、下双刃下槍を元の鉄パイプに戻し、手刀で中間辺りで折る。
ミサイルが迫る。

「動きを止めたか！やれえ！！」

「ああ、危ないっ！！」

マシロが叫ぶ。
だがクウガは動こうとしない。

そして呟いた。

「超変身」

言つと同時にミサイルが着弾する。

ズガガガガガアアン！！！！

煙が広がり、静寂が包んだ。

ヒュン！ ドスッ

「キシヤアアアアア！？」

「え？」

諦めかけたとき、何か煙を突き抜けてスレイブの額に突き刺さった。

剣だ。

紫の刀身の先端に金の刃をつけた剣だ。

術者は信じられない様子だ。

「バカなッ！？

あの攻撃を受けて！！」

そして、ゆっくりとクウガは煙の中からでてきた。
その姿をさらに変えて。

「さらに変わってる！？」

「な…！？」

クウガは、

今度は金で縁取られた紫の鎧を纏い、先ほど投げられた物と同じ剣
を持って出てきた。

そしてそのまま無言でスレイブに向かい、歩いていく。

「くっ、姿が変わったからといって！！
消し飛べ！！」

術者が指示を出し、スレイブが掌からビームを放ち直撃させる。

だが、クウガは攻撃など無いが如く歩き続ける。

「バ…バカな！攻撃は直撃しているはずだぞ！？
効いてないともいうのか！」

そう、効いてないのだ。

タイタンフォームを鉄の壁と例えるのならライジング・タイタンは
鋼の砦だ。

その程度の攻撃など効くわけがない。

「ク…クソつたれがあ…！」
ラ・マルセイエーズ
ならば受けてみよ！超革命的断頭台光断…！！」

攻撃が全く効かないことにイライラが頂点に達し、
最高出力で己が持つ最高の必殺技を放つ。

ゴッ…！！

本日何度目か…大気が震えた。

「ハハハッ！

流石にコレには耐え切れなかったか！！

ハハハハ、ハ―ッハハハハ…ハハ…ha？」

今度こそマシロ姫を殺すための指示を出そうとスレイブの方を向いた瞬間、

彼は固まった。

なぜならば、

先ほど必殺の一撃を喰らわせ消滅させたはずのクウガがスレイブをその剣でブツ刺していたからだ。

「そ…そんな…」

術者は力なく、呟いた。同時に体が崩れ始める。

簡単に説明すれば、

極太のビームを受けながら押されること無く、歩いて近づき突き刺

しただけである。

クウガはそのまま先ほど倒したスレイブと同様、フルスイングで空へ送り出した。

「オオウアアッ！！」

ドカアアアアン…

そして、今回の事件の終わりを告げる最後の爆音が響いた。

- - - - -

戦いが終わり、マシロ達に近づく。

「よう、無事だな」

「はい、お蔭様で」

「そいつぁ良かった」

「お兄さん？強いね、私達はあんなに苦労したのにつ」

「だろ？」

「まあ、精進あるのみだ」

「？…障子？」

「あの…」

「ん？」

「なぜ、助けてくれたのですか？」

「アリカが軽いボケをかましてくれたので、
二ナがちよつと気まずそうにそう、質問してきた。」

「なぜって…助けるのにいちいち理由なんかいるか？」

「！」

「お前達が危なかったから、これで十二分だろ。それに、奴らは人々の笑顔を奪い涙を流させた。それだけは許せなかった。」

「そうですか…」

改めて御礼を言います、ありがとうございます」

「お兄さんありがとう」

「ありがとうございます、クウガさん」

「ああ」

二ナ、アリカ、マシロは笑顔でお礼を言ってくれた。

そして自分のバイクを見た。
見てしまった。

先ほど体当たりをかました前輪部分があらぬ方向に曲がっている事に。

「…まいったな」

「どうしたんですか？」

「コイツを見てくれ、コイツをどう思う?」

「すごく…大々、じゃなくて…うわ、前輪が…」

まいったな…こりゃ丸ごと取り替えなきゃ直らんな。
どうすっかなあ…。

確実に異世界だろうココの通貨なんて持ってないし…

あ、そうだ。

「えーと…姫…様でいいんだよね?」

「（ギク）え、ええ。そうですよ」

「…わかった、内緒にしておく。（ボソッ）
ささやかなお願いなんだが…バイクを直してほしい」

「え?

ああ…でも修理屋なんて知らないし…」

「マシ口様」

「ん?どうしたの、二ナちゃん」

マシロが割りとは死になつて考えていると二ナが呼び止めた。

「ヨウコ主任に見せれば恐らくすぐ直るかと…」

「あ、それ良い考えだね。

あ、でも学園長の許可がいるよなあ…」

「話せば大丈夫かと。

丁度来ました……し」

「え？

あ、ほんと……だ」

見れば、なんだか凄い形相の学園長が歩いて向かってきた。
思わず言葉を失ってしまった。

そこから一悶着、

クウガさんが敵だと思われ間違つて学園長とシズルさんから攻撃を
受けるし（それでも無傷）、

空から巨大なクワガタに乗ったクウガさんに似た白い人が降りてき
てまた勘違いするし（危なかった）、

さらに到着したセルゲイさんからも攻撃受け（鉄砲なので二人とも
無傷）、

その時にクウガさんのバイクがほぼスクラップになり（辛うじてボ
ディーの一部が残った）、

今度はクウガさんが怒るし（かなり危なかった）、サイボーグだと思っていたクウガさんとダグバさんが人間でさらに場は混乱し（変身らしい）、それを見ていた市民が押し寄せて…
一気に疲れた。

逃げるのに。

そりゃ、巻き込まれたら塵すら残らないからね。

そりゃもう必死に逃げたさ。

で、場所は学園長室に移る。

戦って 戦って 疲れて（後書き）

嫌いじゃないけど戦闘がさっぱりしすぎている。
と、友人から指摘された。

なので微妙に長めにしたみた。
かなり疲れた。

誤字、脱字があつたら遠慮無く指摘を。
感想もまっています。

次回 おそらく戦闘なし 学園編？

新たな始まり（前書き）

台風が通り過ぎてなんだか少し涼しくなりなしたね。

遅くなっ たわりには短いです。

では、どうぞ。

新たな始まり

ガルデローベ学園 別名、乙女の園 学園長室

先の戦闘と一悶着から一夜明け、
学園長ナツキ・クルーガーを筆頭に数人で突然現れた夜、ダグバ両
名に話を聞いていた。

…ココの学園長ナツキ・クルーガーさんとシズル・ヴィオーラさんに
この星の歴史、この国の歴史、文化、商業、軍事、etc…
それらを簡単に聞き、闇月さんの『ココは異世界論』は当たってし
まった。

聞き終わりボクは盛大に本日最初の溜息をつく。

「…どうやら本当に闇月さんの予想が当たりましたね」

「だな」

それを聞き、アリカは目を輝かせ迫ってきた。

「凄くいつ、異世界から来たなんて!!」

「ア、アリカちゃん!？」

「アリカ声が大き過ぎよ」

「だって異世界だよ凄じゃん！
ね〜ね〜、闇月さんとダグバさんの世界ってどんな所？」

「こらアリカ、質問は後にするんだ」

「そうどすえ、アリカちゃん。

マシロ様も二ナちゃんも困つとるさかい」

「はあ〜い……」

そのあまりの大きな声にマシロは驚き、二ナが目を回しながら言う
が効果無し。

アリカに押され、質問を受けそうになるが学園長とシズルさんに止
められてしまった。

アリカは口々にし、しゅしゅ後ろに下がる。

「さて…君達はこれからどうするつもりだ？」

「…行く当てなんてないですからね、正直途方に暮れています」

「君達の話が本当だとすれば当然お金も無ければ身分証も無いのだから？」

「…はい、何にもありませんね」

「俺も同じくだ」

闇月さんが言い終わると同時にボク達三人はこれまた盛大に溜息を吐く。

…ほんとうにどうしようか。

と、考えてる内にシズルが言う。

「ん…」

うちに名案があるんやけど聞いてみまへんかえ？」

「なんだ？シズル」

「二人にココで住んでもらうのはどうやるか」

「…ふうむ、微妙だな」

「え？なんでですか？」

二人の会話に入ったのはマシロ。
なぜ微妙なんてことを言ったのか、単純な疑問だった。

「マシロ様、ココがどこかお忘れですか？」

「ここはガルデローベで……あ、」

「気づきましたね、

そう、ココには特別な例外を除き男子禁制のルールがあるんです。」

「ああ…そうでしたね。

（特別な例外ってボクのことかな…）」

などと非常に微妙な表現をナツキがしてきたのでマシロの背中に嫌な汗が流れる。

基本的にココ、ガルデローベ学園は男子禁制である。

年に一度の見学会の日以外は掃除業者であろうと男子は絶対に入れない。

国のお偉方でさえも事前に許可を取る必要があるほどである。

実を言うと先日のテロで会った時からセルゲイが怪しい。

なぜかこの二人を警戒しているのだ。

表にはそれほど出さないが…

「…我に名案有り」

「急にどうしたダグバ。
何に影響を受けた」

「…とある時代劇です」

「…そうか。」

詳しくは聞かないでおう」

「で、名案とは何かな？」

最初の名案発言以来なんかボソボソ言っているのでシズルが声を掛ける。

「おっと、すまん…で？」

「…お答えしましょう、それは…」

- - - - -

その話し合いから一夜明け、朝日が昇りいまだ復旧作業が続く街を照らす。

ここはコーラルオトメ教室内。

本日もまた、いつもと同じように授業が始まるうとしていた。

いつもならすぐ授業に移るのだが、担任ユカリコ・シュタインベルクが口を開く。

「はい、皆さん居ますね？」

本日は授業を始める前に新任の先生を紹介したいと思います。どうぞ、お入りになってください」

ガラッ…と扉を開け、長身の男性二人が入ってくる。

一人は下手をすれば女性より長い黒髪を揺らし、

もう一人は銀色の髪と翠色の瞳をした男性が入ってきた。

「うわ、二人ともカッコイイ…」

「銀髪なんて珍しい」

「あたしは黒髪の人のほうがいいな」

「わたしは銀髪の人の方が…」

「こら、私語は慎みなさい。失礼ですよ」

入るや否や、教室がざわめきだしたのでユカリコは注意を入れる。
注意を聞き、生徒達はやっと静かになる。

「では、お願いします」

「じゃ、俺から。」

名前は闇月夜、授業は主に戦闘訓練と家庭科の調理を担当する。
よろしくな」

黒髪の男はそう名乗り、

「ボクは東白金と申します。
同じく家庭科で裁縫を担当します。戦闘訓練も交代交代で教えますよ。」

「よろしくおねがいします」

続けて銀髪の青年も言った。

夜はマシロを見つけ、手首だけを動かして手を振る。
マシロもそれに気づきお辞儀で返す。

アリカは声にこそ出さないが手をブンブンと振っている。

ニナはマシロと同じく軽くお辞儀をした。

「はい、というわけで今日から新任の先生として皆さんと共に過ごすことになりました。」

オトメとして粗相の無いようにね」

「「「「はい」「」「」」」」

「よろしい、では閻月先生、東先生また後ほど」

「ああ、また」

「はい、ではまた後で」

ダグバの提案…

それはココの職員になれば問題無いのでは？と。

その手があったか！！と学園長達はあっさりOKし、
次の日…つまり今日から早速働いてもらうこととなったのだ。

監視やそこらへんの意味もあるのでな。

このほうが都合がいいらしい。

こうして…

ココ、ガルデローベ学園での教師生活が始まった。

新たな始まり（後書き）

PSPでスパロボ新作でないかなあ…

誤字、脱字があつたら遠慮なく指摘を。
感想も全裸でまっています。

次回 急展開…かも？

ちよいと息抜き！？（前書き）

夜はちよつと涼しくなつたかな？

昼間は会いも変わらず…

では、どうぞ。

ちよいと息抜き！？

「ほい、戦闘訓練終了」

「…お疲れ様でした」

「でした」

「…」

夜と白金が倒れこんでいる生徒達に聞こえるように大きめの声で言う。

只今午後の戦闘訓練が終了したところである。

夜とダグバこと白金が教師になってから早一週間。

二人ともすぐに馴染み、生徒達からも人気が出てファンクラブもできたほどである。

オトメの専門雑誌『乙HIME GRAPH』にもいつのまにか載り、世の男性達から憧れ、嫉妬、妬みetc…

色々な目で見られている。

着任して以来、家庭科の授業が生徒達の間では癒しの時間になっている。

他の先生ほど素行に厳しくないなので家庭科室が心のより所になっているのである。

夜の教える料理は生徒達だけでなく、教員達からも人気である。

コーラルの担任のユカリコ先生を始め、学園長までこっそり習いに来るほどである。

ちなみに、料理の話を通してエルスティン・ホーとも仲良くなった。

一方、白金の教える裁縫の授業も人気授業の一つになっている。

主に小物類を作るのだがそのセンスが関心を集めている。

和風とも洋風とも似つかないのだがその紋様が素晴らしいの一言。しいて言うなら古代グロンギ紋様？

しかし、戦闘訓練となれば人が変わる。

特に二人で戦闘訓練を行う時は生徒からは笑顔が消える。

まさに『地獄』の一言。

ちなみにマシロも参加させられている。

勿論、オトメ達とは別メニューだがそれでも全身筋肉痛は免れない。

「きゅう〜…」

「ハア、ハア…相変わらず、キツイですね」

「あだだだだだ…」

「マシロ様、大丈夫ですか？」

「ハハハ、でも一週間でかなり良くなっているぞ。
若さってヤツかね」

「…ですね。」

飲み込みも早くてやりがいがありますよ」

アリカは目を回し、二ナは仰向けに倒れ、マシロは全身の痛みに唸り、エルステインはそれを心配し傍に寄る。夜と白金は素直な感想を述べる。

「よし、ちょっと早いが終わりにするぞ。
ゆっくり休みな、解散」

「…皆さんお疲れ様でした、また明日」

「「「「はい」」」」

- - - - -

場所は移り、ココは学園長室。
学園長とシズルが話しをしていた。

「なかなかいい感じに指導しているみたいじゃないか。
生徒達からの評判も上々だ」

「そつどすなあ。

最初こそ少し抵抗があつたみたいやけど…
今じゃ人気の先生やし」

最近では生徒達も放課後、夜や白金に料理や裁縫を習いに行くほどである。

おかげでナツキは最近行けていない。
それが一番の悩みの種になっているのだが、いくらシズルでも間違つても口に出せない。
何を言われるかたまつたもんじゃない。

「ところでシズル、なにか用があつたんじゃないのか？」

「あ、そうやった。
調査票に決算報告書、考査に…
いつものコレ」

「エアリーズからか…」。

相変わらずマメな子だな、アリッサは」

その差出人を見て、ナツキの顔は優しい笑顔になる。
そして立て掛けてある写真に目を写す。

- - - - -

んで、時は少し進む。

場所はコーラルオトメ教室内

何故かいきなり学園長と見慣れぬ金髪の少女とそのメイドらしき者が入ってきて、

学園長が黒板に『オトメVSメイド』と大きく書き、叫び始めた。

「これより、両者の比較試験を行うっ！！
これはオトメの尊厳を賭けた戦いだ！

オトメの優秀さを見せ付けてやれ!!!」

ビシィ!!

という効果音が聞こえてきそうな感じである。

「マシロ様、これはどういことですか？」

「あ、白金さん。

実はですね……」

なんでもあの金髪の少女が学園長の妹らしい。

何故ココへ来たのかというと、セルゲイ宰相が新型兵器導入試験のお披露目に招待されたらしく、

このMAIDミユの有用性を見せに来たらしい。

MAIDミユを元に量産型のアイアンメイデンシリーズも製造中だという。。

今回の勝負は全部で四回、行っ。

ちなみに何故四回かと言うと、本日の時間割と同じ科目をやるからである。

一時間目 美術

二時間目 調理

三時間目 数学

四次元目 体育

てなわけで開始されたのだが…
結果だけ言おう。

惨敗だ。

あのメイドロイド…

“Multi-purpose
Assistant-type
Independent
Droid”

略してMAIDだ。

いくらオトメといえど機械の計算速度についていけない。
料理で負けたエルステインは後で夜によるOHANASSIが実行さ
れた。

戦闘ならおそらく勝てるだろうに…。

余談だがオトメも略称だったりする。

“乙-Type
Highly-advanced
Materialising
Equipment”

てな感じになっっている。

そんな感じで次の日になる。

場所は学園長室。

セルゲイ宰相が訪れ、昨日行った新型兵器評価試験の結果を報告しに来ていた。

ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべながらメイドの素晴らしさを言うセルゲイ。

その話を聞きたびに小さくなるアリカ、二ナ、エルステイン。

そして話は『蒼天の青玉』に移る。

アリカ、二ナとの仮契約がもう少しすれば解除できる。
それを聞いた瞬間マシロ達の表情が凍りつく。

さらに、マシロ姫の護衛をオトメの変わりにメイド一個小隊を導入するといふのだ。

そんなもの納得できる訳もなく、アリカは学園長にMAIDミユとの舞闘の許可を求める。

まあ、普通はそんな許可など出せるわけではないのだが…

「許可する!!!」

ダン！！！と机を叩きながらそう叫んだ。

さらに勝つたらオトメハートを3つ与えるという。

このオトメハート、三つ揃わなければ試験が突破できないのである。今のところ足りないのはアリ力だけなのだが、そこらへんは頭に血が上っているから気づかない。

だがアリッサは言う。

「結果が見えているのにまだ続けるのですか？」

「お前は知るまい！

極限に追い込まれたオトメが見せる神秘の力――

根性をつ!!!!!!!!!!」

ここで美力ではないのは単なる言い間違いだと思いたい。

そんなこんなで明日、風華宮の舞闘場で闘う事になったのである。

それを見ていた夜と白金が周りのは聞こえないように会話をする。

「困ったもんだな、あのお姉ちゃんは」

「……ですね。」

アリッサちゃんがあんな悲しい顔をしているのに気づかないなんて」

「普段だったらこんなことはないだろうが、今回の件については皆頭に血が上っているからなあ」

「…タイミングを見てちょこつと助言します。闇月さんはアリッサちゃんの方を頼みます」

「言われなくてもわかってるぜ」

「…あ、後近々あんまり良くない事が起きるかも」

「予知か？」

色々と便利だな。んで、内容は？」

「…はい、実は……」

.....

皆に聞こえないよう、夜と白金はこっそりと話を進めるのだあった。

そして、

『オトメVSメイド』

決戦当日を迎える。

ちよいと息抜き！？（後書き）

前の次回予告で急展開！？とか書いたけどそんな展開はなかった。

そろそろHERO SAGA No.3が出てもいい頃だと思っ今日この頃。

誤字、脱字があつたら遠慮なく指摘を。

感想も胡坐をかいて待っています。

次回、戦闘します。

再びの襲来（前書き）

不定期更新と言っていたが最低でも一週間以内と決めていた。
しかし、パソコン壊れるわ携帯の液晶が壊れるわで一週間過ぎてしまった。

本当申し訳ない。

では、どうぞ。

再びの襲来

今回の『オトメVSメイド』の舞闘。

結果だけ言えばなかなか良い勝負だったんではないだろうか。

…奴らが来るまでは。

- - - - -

メイドの方はミュー人。

オトメの方はマシロと仮契約しているアリカ、二ナに、エルスティンを加えた三人。

三対一ともなれば普通は状況的に不利である。
だが、そうでもない場合も多数ある。

例えばチームワーク。

例えば個々の性格。

例えば個々の技量。

例えば個々の経験。

例えば個々のプライド。

…等々色々ある。

過去の戦歴を見ても多対一でも勝つ場合は大いにある。

さて、前置きはこれで終わりにして今回の舞闘。

戦鐘が鳴り響いてから数分が経過している。

コーラル三人娘が善戦し、ミュも本気のミスリルドレスを纏い、勝負が激しさを増そうとしていたその時、シュバルツがこの風華宮に堂々と乗り込んできたのだ。

スレイブの数は五。

内二体は見たことがないスレイブだ。

同時にマシロの前にラドが現れる。

「マシロ・ブラン・ド・ヴィントブルム、

…その首、もらい受けに来た」

「下がりなさい！不届き者！！」

しかし二ナとエルステインがその間に割って入る。

「マシロ様、ガルデローベに救援要請を！！」

「わ、わかりました。お願いします！」

「市警に命じ護送中の学園長に伝令を！！
ガルデローベには…私が伝える」

セルゲイがマシロに言う。

しかし、最後の一言の時…嫌な笑みをうつすらと浮かべていた。

そんなことはいざ知らず、アリッサはMAIDミユに命令を出す。

「ミユ、あなたの力を見せるいい機会です」

「了解です、お嬢様」

MAIDミユはスレイブに向かい突撃する。

そして夜がマシロ達の前にスツと出る。

「夜さん…」

「アイツは俺に任せてもらおう。
なに…心配するな、マシロ。
三人とも、マシロとミュと頼んだぞ」

「「「はい!!」「」「」

「いい返事だ。さて…」

そう言い、さらに数歩前に出る。
その様子を見てラドが口を開く。

「戦士でない者がでしゃばるな、怪我をしたくなければ去れ」

「ハハ、残念だが俺は戦士だ」

「ほう…、ならば名を聞こうか」

「おうよ、パーフェクト・サイボーグ完全儀体ラドよ」

初対面、しかも名乗りも上げてない者に名を言われ、驚愕する。

「！！」

なぜ我が名を知っている？」

「聞いたからさ、白金からな」

「白金…？」

ラドの不思議に思う声を聞き、夜はニヤッと笑う。
同時に腰あたりに手をかざし、ベルト・アークルを出現させる。

「！！それは！？」

「教えてやろう、白金のもう一つの名…」

そう言いながら、砕けて転がっている手すりを蹴り上げ変身のポーズをとる。

「俺の相棒、ン・ダグバ・ゼバだ。
変身」

「――！あの時の――！！」

その名を聞き、ラドは思わず声に力が籠る。

同時に夜から青い輝きと雷の走り、ライジング・ドラゴンへと変わる。

「その姿！？」

「名乗ろう、俺の名は仮面ライダークウガ。
人々の笑顔を守る者だ」

計算して蹴ったのでタイミング良く落ちてきた手すりの棒を掴み、
ドラゴン・ロッドで
双刃槍へと変える。

「あやつの相棒か……面白い。

この前は遅れをとったが今回はそうはいかん」

「どうだろうな、簡単には倒れないぜ？」

その言葉を最後に、二人は視界から消える。

同時に、数十回の金属の衝突音、視界に広がる青と紫が入り乱れる。音が止み、少し離れて二人はお互いに背を向けて地面に降りる。

「なかなかやるな」

「く…なんという連撃だ」

クウガは無傷、対してラドは無数の傷があり、自身の剣もヒビが入っている。

ラドは剣撃のみならず、殴りや蹴りといった格闘術も混ぜて攻めたのだがことごとく失敗。

剣は槍に流され、拳は反らされ、蹴りは利用され、カウンターも貰うが紙一重で避ける。

受けに回ってしまえば、途絶えることの無い凄まじい連続攻撃を喰らう。

さながら荒れ狂う川の水流を相手にしているような感覚だった。

「まあいい、時間は稼げた。」

スレイブも数体失ってしまったが……我らが悲願のため、ここは退かせてもらおう」

そう言い、懷から出した手に収まるサイズの何かを投げつける。クウガは反射的にソレを斬ってしまう。

「あ、やべ」

同時に閃光と煙が広がり、辺りを包む。

.....

「っち、逃げられたか」

「夜さんっ!!」

「マシロか」

軽く舌打ちをし終わり、聞き覚えのある声の主の名前を呼びながら振り向く。

同時に変身を解き、トランス・ロケット双刃槍も元の手すりに戻る。

「四人とも無事だな」

「はい、少し苦戦しましたが大丈夫でした」

「『蒼天の青玉』が力を貸してくれたんだよっ!」

「そうね、あの時アリカがやってくれなかったらあのMAID…ミユさんも危なかったわ」

「アリカちゃん凄かったんですよ!!」

どうやらちょっとピンチだったらしい。

だが『蒼天の青玉』がアリカに力を貸してくれたみたいでその危機を乗り切ったようだ。

「そうか、よく頑張ったな…と言いたいが…」

「『『『え？』『』『』」

喜んでゐる表情、雰囲気から一転、不安な顔に変わり空気も若干沈む。

「俺はアリッサとミユのことも頼むと言ったはずだ。

それなりに近いとは言え、それをほったらかして来るのはちょっとマイナスだな」

「でも、アリッサちゃんにはミユさんが…」

マシロが反抗する。

「甘いぞマシロ。

アリッサはあの大国エアリーズの大統領の次女、しかも技術主任の立場も持っている。

ある程度の数ならミユでも問題は無いが大部隊で暗殺・拉致作戦など展開されたら一人では対処できない。

いくら力を持っているとしてもたかが一人だ、数で攻めて来られれ

ば限界はある。

しかも風華宮に白昼堂々と乗り込んでくる例を見ないこの状況、
こういう混乱した時ではただでさえ隙が大きくなる。

そこを突かれたら最悪の結果も招きかねない。

故に、頼んだぞ…と言ったんだ」

その言葉を聞き、マシロ達は思わず顔を伏せてしまう。

自分達の早計な判断の危なさに気が付いたのだ。

「（わかってくれたみたいだな、こいつらは良い経験をした。）

だが舞闘はなかなか見事だった。鍛えた甲斐があっただってもんだ」

めったに褒めない夜の評価をを聞き、オトメ三人組はパアッと顔が
明るくなる。

「「「ありがとうございますっ！」「」」

と、礼をし風華宮の復旧作業に向かった。

自分のマスター（仮）を置いて。

「まあ、今回は許してやるか」

「ハハ…厳しいですね、夜さん」

「ちゃんと教えてやらないと、救える人達も救えなくなるからな」

「…そうですね、ありがとうございます。夜さん」

「ああ。」

さて、行くぞマシロ」

「はいっ」

少し遅れて風華宮に戻り、マシロは指示を出し、夜は復旧を手伝った。

「さて、あつちはどうなったか？」

あつち、とは白金ことダグバの方である。

昨日の夜、嫌な予知の内容を話し合い、分かれて対処という形で当

たることにした。

夜は風華宮、白金は秘密裏に行われるプリズナーNo・17の護送に。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

時は少し遡り、風華宮襲撃とほぼ同時刻、
プリズナーNo・17護送車後方、白金はバイクに乗ってこっそり
追跡していた。

再びの襲来（後書き）

涼しくなりましたね。
夜なんかは寒いが。

次回は白金Side。お楽しみに。

17歳の破壊神 前（前書き）

諸君、私はカルピスが好きだ。 大好きだ。

濃いめが好きだ。 薄めが好きだ。

冷たいのも好きだ。 暖かくするのも好きだ。

みかん味が好きだ、ぶどう味が好きだ、りんご味が好きだ（ry

昼だ。

どうぞ。

17歳の破壊神 前

プリズナーNo.17を護送。

恐らく……いや、100%の確立で奪還作戦が展開されているだろう。なんせ、プリズナーNo.17はシュバルツの頭領なのだから。

風華宮で『オトメVSメイド』の舞闘が開始されると同時にこちらも出発。

およそ十分、案の定シュバルツが来た。

この時、同時に風華宮も襲撃を受ける。

スレイブも8体連れてきている。

パーフェクト・サイボーグ

おまけに、幹部クラスらしき完全儀体も二人。

即座に迎撃に出るシズルと、

今回の護送のために来た『麗竜の天藍石』、

お超夫人の異名も持つ金髪巻きロールのレイラ・マリポーサ。

瞬く間にスレイブを半分まで減らし、二人は幹部と戦っている。さすがはマイスター。

その様子を少し離れた所で見ている白金はある事を考えていた。

奪還作戦にしては戦力がいささか少ない……と。

もし、自分が指揮官であればスレイブを最低でも二十体は用意し、

機動力重視の兵を十、狙撃兵をさらに十は配置する。

まずは、オトメの無力化。

マテリアライズをし、ロープを纏われては銃弾など効かなくなってしまうので、狙撃でカタを着ける。

たとえ失敗しても、視力、聴力を奪うなどやり方はいくらでもある。

それがない。

只単に真正面から馬鹿正直に突っ込んでいる。

スレイブももう半分以下に減ったというのに未だに焦ること無く戦っている。

おかしい。

そこで一つの考えが浮かぶ。

それは、拘束されている自分達の頭領・プリズナーNo.17を確実に奪還する手段を持っている。

もしくは別の目的、または最初から奪還する気がない。という事が。

可能性としては無くはないが最後の二つは限りなく低いだろう。

だがもし、確実な奪還手段を持っているとすれば…

まずい、聞けば今回の護送対象のプリズナーNo.17…

カルデア第二の都市であり随一の歓楽街でもあるマルドゥークを焦土と化し、

カルデア軍一個師団をも壊滅させるほど。

その作戦には勿論各国からの応援を含め、数名のオトメも参加し、

オトメの中からも死者が出たほど。

捕らえられるまでに全体で数千の死傷者を出し、
ウォーキングカスターロフ
生きた破壊神と恐れられたほどだ。

いかにしてココで大人しく捕まっているのかは謎だが…
もし、そうだとすれば非常に危険だ。

白金が、バイクに力を送る。

するとバイクはダグバと似たような白亜の装甲と金の装飾のバイク
に姿を変える。
マシン・ゼバ。

正式決定ではないがとりあえずこう呼ぼう。

「変身」

自身も姿を変え、バイクに跨り、猛スピードで走り出す。

歌が聞こえる。

なんだ？

これは…

17歳！？ ↑おいおい

遠目と、その動いた対象が小さかったのでよく判らなかったが…
少し太った猫？のようなモノが護送車の扉の前を通り過ぎた。

そして何故か扉が開いてしまう。

バイクに跨ったはいいがまだタイミング的にあんまりだ。
ということに気づき、再び隠れる。

一様、ピンチになるまでは助けよう。

と思っていたのでまた物影から様子を伺っていたダグバ。

あの黒い猫に疑問が抱く。
なぜこの場にいたのか？

野生の動物ならば戦闘音と雰囲気近づかないはずだ。

そんな思考を巡らせる暇も無く、
幹部クラスが何か丸い物を投げ入れる。

あれはなんだ？

数秒、護送車が爆発中からは…

「ミドリちゃん、参上！！！！」

と、勢いよく、

ハルバードの形状をした武器を持った、女が出てきた。

「ちなみに１７歳よ」

「嘘おっしやい！！！」

すかさず、金ロールがツツコミを入れる。

違っ、違っんだよ…金ロールさん。

そこは、おいおい！と言わなきゃいけないんだよ…。

17歳の破壊神 前（後書き）

17歳には暗黙の了解があるんだっ！！！！

次回、後編。

17歳の破壊神 後（前書き）

遅れて申し訳ない。

少し変えていたんですが、
やっぱり元に戻させてもらいます。

どうぞ。

17歳の破壊神 後

レイラは思わず叫ぶ。

「あなたの襲撃でカルデアーの歓楽街マルデークは焦土と化し、多くの命が消えたのですよ！！」

「墮落と腐敗のゴミ溜めに、正義の鉄槌を下したまでよっ！！」

「テロリスト如きが何をッ！！」

レイラがミドリに突っ込む。

シズルは邪魔が入らないように他の幹部を抑える。

ラケットフレーム型のエレメントでハルバードと打ち合う。

オトメの中でも確かな実力を持つレイラはミドリになかなか反撃を許さず、

武器のリーチの差もあり、着々と追い詰めていく。

武器どうしの凄まじい衝突音、打撃によるぶつかり合い、気迫による空気の振動。

少し離れて見ているダグバにもその音は十分に聞こえる。

だがダグバは思った。

弱い、と。

弱すぎる。

この程度の実力でオトメが守る国一つが消えるはずがない。

まあ噂には尾ひれが付き物だが…

いや、事実マルデークは消滅している。

ということは力が発揮し切れてない？

だがあの自信はなんだ？

あれだけ追い詰められているのに関わらず。

何かを隠している？

この状況をひっくり返せる何かを。

そして、その自信の正体が姿を現す。

ミドリは武器をフルスイングでぶつけ、

レイラを飛ばし自身もそこからさらに距離を取る。

「くっ！！」

「やるね、さすがだよっ！！」

だがこれで終わりよ！！！！

来たれ鋼の眷属！！愕天王ーッ！！！！」

空間が歪み、中から鋭い角を生やした四足の鋼の獣が出てきた。

雰囲気でわかる。アレは他とは違う、と。

「いまこそ見せよう！！我が正義をッ！！

愕天王、究極合身！！！！」

その掛け声と共に、愕天王がバラバラになり、ミドリに鋼の鎧として装着される。

強攻装着型スレイブ 『愕天神』！！！！

煌びやかな鋼のセクシー鎧を纏い、ミドリは言い放った。
不味い。ダグバはそう思ったが時既に遅し、ミドリとシズルが突っ込んだ。

「小ざかしいッ！！」

しかし距離にして2 mまで迫ったオトメ二人に対してミドリは動じず、空中でデコピンを放った。

「「！」「」」

信じられない。オトメの二人はそう思った。そう、デコピンの中指を振りぬいただけで衝撃波が発生し、地面は砕け、自身も吹っ飛んだのだから。

「これが真の正義の力よ！！」

しかし、オトメとして倒れるわけにはいかない。何より皇帝陛下^{コーチ}のために。その思いがレイラを立たせる。

「…ふ…よろしくってよ…」

皇帝陛下との血の滲む特訓の末に編み出したこの技…
コ―チ

美 力 発 動

「お受けあそばせッ！…！」

レイラが己が持つ最高の必殺技を放つ。
その動きはテニスのサーブを打つが如く。

狙撃弾「」《サービスターンエース》！！！！

凄まじい速度で打ち出された光り球がミドリを直撃する。
轟音と共に地面は砕け、ひび割れ、天に柱が上る。

「ハア…ラブ・ゲーム…ですわ…ハア」

見下げた先には数十mにもなるクレーターが出来上がっていた。
しかし…、轟音と共に瓦礫が舞い上がる。

「甘い、甘い過ぎるわとろける程に!!
この程度の攻撃じゃあ私の正義は燃やし尽くせないよ!!!!」

なんとそこには無傷のミドリが立っていた。

「まさかッ!?!」

思わず我が目を疑うレイラ。
その隙を見逃さず、ミドリがレイラに向け手を翳す。
するとレイラの周りに淡い光りが発生する。

「なッ!?!動かない!?!」

それがレイラを拘束する。
そしてミドリが猛スピードで迫る。
そして必殺技が炸裂する。

ミドリ・ウルトラ・ダイナミック!!!

高速で武器を振りかざし、突っ込んでくる。

「ッ!」

レイラは思わず目を瞑る。

こんな所では死ねない、だがどう考えてもこの状況ではゼロに等しい。

シズルもこの距離では間に合わない。

(ああ、^{コーチ}皇帝陛下…!めんなさい…)

だが、その衝撃がいつまで経っても来ない。
目を開けようとしたその時、声が聞こえた。

「…下がっててください」

「あ…」

そこには、白亜の装甲に金の装飾を付けた鎧のようなモノを着た異形が、
素手でミドリを斬り裂こうとした刃を止めていた。

「なッ!？」

何者だい! あんた!？」

手加減などしていない、最高のタイミングで最高の一撃を放った筈だ。

それを止められた。今まで一度たりとも敗れた事の無いこの技が。
しかも素手で。

そう、ダグバは刃のところをガッチリと掴んでいる。
そして、この僅かな隙を見逃すほどダグバは愚かではない。

まずその武器を砕き、

「なあッ!？」

顔を殴るのは若干忍びないので腹を蹴り、吹き飛ばす。

「ぐふあ!?!」

「リーダー!？」

妙な喋り方をしていた幹部も驚きを隠せない。
蹴られたミドリは吹き飛びながら地面を数バウンドし、土煙を上げながら衝突音と共に止まる。

「あ、あなたは…」

「…今は休んで下さい、シズルさん頼みます」

「クッ…うちらもまだまだどすなあ…暫く動けそうにありません、
お願いします白金さん。」

あと、これを。これは・・・」

シズルはら指の一関節程度の大きさの物を渡される。

「…心得ました」

ダグバは再びバイクに跨り、吹き飛ばされた方へと走り出した。
それを見ていたレイラがシズルに聞く。

「シズル、彼は…」

「ああ、レイラはんには話してまへんどしたか、彼はウチの家庭科の先生どす」

ニツコリと良い笑みでそう言った。
それを聞き、レイラは暫く固まってしまった。

「…は？」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

ダグバの蹴りで吹き飛ばされたミドリ。

鎧天王を装着してたおかげでどうにか致命傷だけは免れた。
しかし、このまま戦闘続行は不可能に近い。

悔しいがここは引き上げると結論を出す。

「く…なんて蹴りだ…」

「リーダー！オールライっ？」

慌てて追いついた丸頭の幹部が心配そうに聞く。

「ああ、なんとかね。」

…悔しいがここは引き上げるよ!!」

「了解サー」

「ラドは？」

「別ルートで既にエスケープ中」

「よし、ならアタシ達も行くよ」

てな会話は丸聞こえである。

数m離れた木々の間で人間体で気配を絶ち、様子を伺っている。

シズルからの頼まれ事で撃破から本拠地を突き止めるに変更したので戦闘体でいる必要はなくなった。

そのために先ほど渡されたキヨヒメという蛇型の発信機を忍ばせに来たのだ。

だがそれもすでに完了している。

ポニーテールの中にブン投げて忍ばしたのでok。

さて、何故まだココで話を聞いているのかというところ…
今回の襲撃、あまりにもタイミングが良すぎるのだ。

護送に関してもオトメVSメイドの舞闘に関してもだ。

それを考えると結論は一つしかない。

それは、内通者がいるということ。

ココでの会話の中にあわよくばその内通者の名前が出てくれば聞いておこう。

というのが魂胆である。

だが、そう上手くはいかないモノである。

同志「S」という人物が今回の手引きをしたと思われるのだが…それ以外は喋らなかった。

そして去ってしまった。

それを確認してから白金は腕を組みながら出てきた。

「…同志「S」ですか。

それっぽい人に心当たりが無い訳でもないですが…まだ断定はできませんね。

…とりあえず、戻りますか」

隠してあったバイクに跨り、シズル達の下へ戻って行く。

- - - - -

少し離れたシズル達の下へ戻り、声を掛ける。

二人ともマテリアライズを解き、救援の医療班に治療を受けていた。

「シズルさん」

「おかえり、白金はん」

「……どうです？体の方は」

「心配いりまへんえ、私もレイラも」

そんな会話をしている横で、

レイラは誰？という顔で見ている。

「シズル、彼は？」

「あれ？さっき助けてもらたやないの」

「は？」

「…シズルさん、さっきはこの姿じゃなかったから判らないですよ」

「あ、そうやったわあ」

「え？さっきって…え？」

未だにわからない様子でシズルと白金の顔を交互に見ている。
首が疲れないだろうか…

「…東白金です。ガルデローベでは戦闘と家庭科の主に裁縫を担当しています」

「それと…もう一つあるやろ？」

そう言うと同時に白金は白い光りに包まれる。
光りが収まるとそこには先ほどレイラを救った白い異形が立っていた。

「ええ！？まさか貴方が？」

「…白き闇、ン・ダグバ・ゼバです。以後お見知りおきを」

と、丁寧にお辞儀もしながら名乗る。

「そう…貴方だったのね、改めてお礼を言っわ。
助けてくれてありがとう」

「…いえいえ、当然ですよ」

「ふふ、白金はんは頼りになるさかい」

「そうね、その内一対一で舞闘をしたいわね」

「…そのうちに…」

人間体に戻り、苦笑いを浮かべる白金。

そして、考えていた。

今回はこれで終わりみたいだが…、次は今回以上に苦しくなるはず。
リーダーが帰ってきた事により、士気が上がり活動はより一層活発
になるだろう。

そして気がかりなのはこちらの内通者の同志「S」という者のことだ。

こちらの事をどこまで知られているかが問題なのだが…

まあ、一先ず夜さんと合流してから話し合おうか。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

ガルデローベ学園 校門前

一旦アリッサとミュがエアリーズへ戻るため、マシロ達は見送りに集まっていた。

「計算を超える根性というモノを私は知りました。
私の負けです」

晴々した顔でミユは言った。

たかがコーラルと侮り、その結果敗北寸前まで追い込まれたこと。スレイブに電撃を浴びせられ、早計な判断でアリッサを悲しませたこと。

自分はまだまだだと思い知らされた。

「お姉ちゃん、年に一度くらいはエアリーズに戻ってきてね」

「あ、ああ……」

そう言いながらアリッサはナツキを引き寄せ、頬にキスをする。ナツキは恥ずかしそうに顔を赤めながら、心底嬉しそに笑顔になる。

「夜さん、ありがとう。貴方の言った通りだったわ」

「さて、なんのことやら」

「ふふ、ありがとう」

「ああ」

「？」

舞闘の前の日の夜、夜はアリッサにある言葉を言っていた。
ナツキに嫌われているんじゃないかと思うアリッサに対し。

その時はアリッサはあまり聞く耳を持たなかったが、スレイブの襲撃の際、

ナツキは夜と入れ替わりになる形で風華宮に入っていた。

そこでアリッサを襲った奴らに怒り、撃破。

すぐさま駆け寄り心底心配してたようで、涙を見せるほどであった。

その時、アリッサは夜の言った言葉を思い出した。

『アリッサちゃん、家族はね、どんなことがあっても家族なんだ』

たったこれだけ。

全てを理解したわけじゃない、けど、何かわかったような気がした。
自然と嬉しくなった、涙も出た、笑顔になれた。

「さ、帰りましょうミユー!!」

帰ったらビシビシ根性鍛えるんだから!!」

「はい、アリッサお嬢様」

シュシュとパンチを繰り出しながら言うアリッサ。
ニコニコと嬉しそうに返事をするミユ。

大丈夫だな。

二人を見ていると自然とそんな気持ちになれた。

そして車に乗っても手を振りながら、去っていった。

「オトメの名誉は守れたし、オトメハートも皆一個ずつ貰えたし、
よかったねアリカちゃん」

「……でも」

アリッサを見送り、マシロがアリカに対して口を開く。
しかい、何故だかアリカは浮かない表情だ。

「あんなの嘘だよ、絶対。だから…ね？」

あの時、クウガがラドとの戦闘の後の僅かな時間。
マシロとアリカはラドと話していた。

「マシロちゃん…うん、そうだね」

今できる精一杯の笑みをマシロに向ける。

弱弱しい、どこか落ち着かない、焦っているような感情を押さえ込みながら。

その内容は本人達しか知らないが…。

その会話は、夜と白金の耳にはしっかりと聞こえていた。

17歳の破壊神 後（後書き）

どうだったでしょうか？

アドバイス・感想等待っています。

今回は、少し飛び『黒い谷』編。

アリカを探しに（前書き）

今回はグダグダです。

いまいち上手く纏まりません…

どーぞ。

アリカを探しに

襲撃から数日、特に事件も無く…はないが割と平和？に過ごしていた。

お超夫人ことレイラ・マリポーサはプリズナーNo.17を取り逃がしてしまったためこのまま残る事に。

一度戻るか？と皇帝陛下から聞かれたのだが、

「このまま尾っぽを巻いて逃げるのはオトメの恥じですわ」

と言いガルデローベに残ることになった。

ついでに一から鍛えなおすらしい。

そして次の日、事件は起こった。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

マシロが慌ててドアを開け、夜の部屋に入ってきた。
白金もたまたま居合わせる。今後の訓練について話し合いに来たそう
な。

マシロの慌てようから見るに唯事ではないと思い、マシロを落ち着
かせ話を聞いた。
内容を簡単に話すと…

「アリカがいなくなったと？」

らしい。

「はい、探してもどこにもいなくて…」

（もしや、黒い谷にでも向かったのか？
…面倒な事にならなければいいが…）

と、少し考えていると白金から話しかけられる。

「…夜さん。恐らくはあっていると思います」

「ああ…、だろうな」

白金も同じくそう思っていたらしく、夜も答えた。
そして焦ったようにマシロが聞く。

「あ、あの！何か知っているんですか！？」

「…マシロ君にも心当たりはあるはずだよ」

「！！」

ドキッ…としたのだろう、一瞬の体の強張り、目の開き具合からも見て取れる。

だが、何故知っているのだろうか？という疑問がマシロにあった。

あの現場には僕達以外は誰にもいなかったはずなのに…と。

「なぜ…知っているんですか」

「あの時の会話だ」

「あの時…？」

わからなかった。あの時の会話？

この話をしたのはアリカちゃんとだけなのに…。

「アリッサちゃんを送った後の会話だ。コソコソ話していたらう？」

「聞こえていたんですか！？」

距離はそれなりに離れていたはずなのに…

ダグバは人間体とはいえどその程度の距離は問題無く聞こえる。

夜も”元々”は人間だが、

ベルト・アークルと霊石アマダムの完全融合により各器官の能力は、
変身時程ではないが格段に上がっている。

「あの程度の距離では問題無く聞こえる」

「そう…ですか…」

「…では、行きましょう」

白金が唐突にそんな事を言い出した。
夜も予想してなかったらしく、キョトンとしている。

「え？」

「…だから、行きましようと言ったんですよ」

「まて、何故わかる？」

夜もわからないらしく、白金に聞く。

「…この前の戦いの時にシズルさんの発信機を着けたんで、
外されていなければわかりますよ」

「聞いてないぞ」

「…話してませんでしたっけ？」

夜は一回溜息をつき、立ち上がる。

「…まあいい、丁度俺のバイクも仕上がったみたいだし。
慣らし運転ついで行きますかね」

そう、待ちに待った夜専用のバイクが完成したのだ。

ヨウコ主任と夜との共同作業で昨日の夜中にやっと完成したのだ。

「…やっと完成したんですか」

「ああ」

「それって、どのらい（速度）出るんですか？」

マシロが興味本位で聞いた。

ニヤリと笑みを浮かべながら口を開く夜。

「フフフ…、最高で620km/hでるぜ」

「す…凄いですね」

「だろ？」

それにゴウラムも合体して、さらにライジングになれば音速を超える速度が出せるんだぜ」

それを聞いてマシロは想像した。

街を音速を超えた速度で走る姿を…。

…尋常じゃない被害が出そうだ。

「夜さん、街とかではそんな速度で走らないでくださいね」

「当たり前だバカヤロー」

と、マシロにデコピン一発。

「…では行きましょうか」

- - - - -

ガルデローベ学園門前

流線型の黒いボディに赤いフレーム、青い文字で刃の文字。
重低音のエンジンが空気を振動させる。

（詳細は設定をご覧ください。）

「どう？結構自信あるのよ？」

「ヨウコさん、完璧だ。エンジンの音も良い」

「一様分かっていると思うけどで、これが――」

と、製作してくれたヨウコ技術主任と細かい設定を聞く夜。
白金は共に行くことが決まった二ナ、エルステインと話している。

「……では、エルスちゃんは僕の後ろへ、二ナちゃんは夜さんの後ろ

へ」

その言葉を聞き、自分の名前が呼ばれていないと気づくマシロ。

「あれ…？白金さん、ボクは…」

「…ああ、マシロく…ちゃんは特等席を用意しているから安心していいよ」

「特等席…ですか」

特等席、その言葉に若干不安があったがまあいいかと自分で完結した。

しかし、マシロは知らない。

この特等席に地獄を見ることに…。

- - - - -

「あああああああ！！！！」

マシロの絶叫が”空”に響く。

特等席、それはゴウラムの背中である。

夜と白金のバイクの速度に着いて行くため、ゴウラムもそれなりの速さを出している。

夜達にすれば大した速度ではないのだが、やはり普通の人からすれば下手なジェットコースターより怖さは遙かに上である。

そんな中、マシロはゴウラムの背中にへばりついている。
若干涙目になりながら。

「夜さんの馬鹿ああああー……」

再びマシロの叫びが響く。

アリカを探しに（後書き）

ハア…微妙だ。

アドバイス、感想等ありましたら待っています!!

では、また次回。

黒い谷で（前書き）

少し遅くなってしまった。

申し訳ない。

どぞ。

黒い谷で

夜と白金は走り、マシロは飛ぶこと小一時間。

前方に歩いてる人影を発見、髪型からすぐアリカだと判明。

マシロはいち早くアリカに飛びつき、続けて二ナ、エルスティンも涙目になりながらアリカに迫る。

「なんで黙って出て行っただの!？」

「マシロちゃん…」

だって、メーワクかけちゃうし……」

バツが悪そうに、罪悪感からか目を反らして答えるアリカ。

しかし、二ナは嬉しさと呆れを混ぜた表情で、エルスティンは優しい笑顔でアリカに言う。

「勝手にいなくなるほうが迷惑なのよ!」

「そうだよ、アリカちゃん。夜さんと白金さんも来てくれたんだから」

今にも泣き出しそうな顔で、今度は夜と白金を見る。

「一言くらい相談しろ、皆心配したんだからな」

「…アリカちゃん、帰ったら一緒に謝ろうね」

「う…うう…」

全員の言葉を聞き、アリカはとうとう泣き出してしまった。

「みんなあ…大好きっ！！！」

アリカは全員に抱きつき、嬉し涙を流しながら飛び切りの笑顔になった。

- - - - -

アリカと合流して、さらに走ること一時間。
乗る位置を交代しながら、
黒い谷と思しき廃ビル群に到着。

「…発信機の反応はここから」

「なるほど、黒い谷とは名ばかり。谷要素は一つも無いな」

「どーりで見つからなかったわけね」

「え！？そーいう問題！？」

二ナの答えに対するマシロの突っ込みは置いといて、
夜は声を上げる。

「いるんだろう？出てきたらどうだ？」

すると上から声が響く。

「よくぞ来た、我が娘よ。それに戦士よ」

「よう、久しぶりだな」

「フ…、マシロ姫はわざわざ首を狩られに来たのか？」

「アリカちゃんとボクは一心同体なんだ！！放っておけるわけないだろう！！」

「オトメの為に動いたというのか？王族のくせに…妙なヤツだ」

王族のくせに。

夜はそれを聞き、ココの世界の王族はエライ嫌われようだ、と再認識。

それに話を聞く限り、忠誠を誓ったオトメのために動くのは稀なようだ。

そう考えている中、アリカは前に出て叫ぶ。

その表情には期待と不安と焦りと、色々と混ざっていた。

「あの…本当なんですか、お母さんが…お母さんが生きているって

「……」

「……」

これこそが今回の一番の目的。
死んだと思われていたアリカの母親が生きているという。

一般的に考えれば所詮テロリストの言うこと。
情報を調べたのかもしれない、内通者がいたのかもしれない。考え
出せばキリが無い。
そしてそういう類の情報は畏である可能性の方が遥かに高い。
信じるに値しない、と普通は思う。

決してアリカはその情報を信じた訳ではない。
第六感、女の勘とでも言えればいいのか、
生きている可能性が少しでもあるのなら、会いたい。

会いたい一心でココまで来たのだ。

ラドは暫く黙っていたが答える。

「…ついて来い」

そして夜達はある部屋へと通された。

そこには、一人の女性が座っていた。

- - - - -

結論から言おう。

その女性は間違いなくアリカの母親だった。

ただし、十年前起きた彼女の住んでいる村が原因不明の壊滅事件の際のショックと恐怖で心を病み、

マシロをアリカと間違え、実の娘であるアリカを見てもわからなくなっていたのだ。

その十年前の事件の時、救い出したのがラドだった。

怪我の治療のために黒い谷に来たはいいものの、

ココでは身寄りの無いアリカの母、レナを妻として迎えたのだという。

その後、マシロはシュバルツの頭領ミドリと軽い問答。

マシロは怖気づくこと無く答え、

その態度がミドリは気にいったらしく、ちよいと株が上がったみた

いだ。

そして、現在は黒い谷を軽く案内してもらっている。

そこに居るのは殆どがどこかを怪我、

もしくはサイボーグ化をしている者達が夜達を見ていた。

夜はその者達の目に見覚えがあった。

あれは憎悪と怒りの目。

憎くて憎くて、絶対に許さないという目。

元居た世界で、グロンギに向けられていた目、

一時期、その目は自分にも向けられていた。

なんでもっと早く来てくれなかった

なんでさっさと殺さない

死ねよ

お前もアイツらの仲間なんだろう

芝居なんじゃねえのか

真面目にやっているのかよ

気をつける、アイツも何時人間に牙を向けてくるかわからねえからな

来るな、化物

「...ち...」

「よ...ちこ...」

「夜さん」

ハッと目の前を見る。

マシロが心配そうに顔を覗かせていた。

「ああ、すまん。

少し、考え事をしていてな」

「あ、もしかして邪魔しちゃいました？」

マシロは申し訳なさそうな顔で慌てて言った。

「いや、大した事じゃないさ」

「そうですか？」

「ああ、ほら置いていかれるぞ」

「あ、行きましよう夜さん」

そんな夜を見た白金から声がかかる。

「…夜さん、大丈夫ですか？」

「ん？ああ、大丈夫さ。

少し、嫌な記憶が蘇っただけさ」

「…そうですね、あまり無理はしないでくださいね」

「ああ、すまん」

夜と白金はマシロ達の下へと向かった。

ラドと共にいるが、その目はマシロ達を見ている。

マシロ達はその雰囲気にながら恐怖を抱き、縮こまっている。
ふと、マシロがラドに質問する。

「あの、この人たちは…」

「お前達のような権力者が起こした戦争で、故郷を失った難民たちだ」

「えっ……」

マシロが驚きの声を上げた瞬間、マシロの前を小さな影が通り過ぎ

る。

「ラドおじちゃん、おかえり!!」

「おかえり」

子供だった。まだ十にも満たない幼い子供だった。
しかし、

一人は片目を眼帯で覆い、

一人は片足をサイボーグと化し、

一人は片腕が無く、

一人は包帯がほぼ全身に巻かれていた。

ラドはその子供達の頭を撫で、ただいまと言った。
それを聞くと満足したのか、子供達は走りながら再び遊びに戻って
いった。

そんな子供達を見ながら、ラドは言った。

「お前は言ったな、ガルデローベにはレナを救う技術がある…」と

「はい…」

「ならばなぜその技術をあの者たちを救う為に使わぬ……」

強き力とは弱き力を守る為にあるのではないのか？」

マシロは、その光景を見て、何かを思ったのだろう。
その目には様々なモノが見えた。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

同日、夜。

少し離れた所で、彼女は見ていた。

「あれがシュバルツの本丸…」

しかし、

「!」

目が…あつた!?

バカな、気づかれたのか?

そう、白金は見えていた。

完全に気配を絶った彼女の姿を。

「く、だがシュバルツよ、
今日で貴様らは終わりだ」

彼女は遙か後方で待機しているマスターの元へと戻っていった。

その白金の部屋では…

「（…夜さん、気づきましたか?）」

「（ああ、まあまあの気配の絶ちかただったが…俺達にはバレバレだな）」

「（…何かしらあるかもしれません）」

「（ココへの襲撃か？）」

「（…恐らく）」

「（ラド達に知らせておくか）」

「（…いいのですか？）」

「（当たり前だ）」

「（…そうですね、聞いたボクがどうかしてました）」

「（ハッ…、なら行くぞ。お前はマシロ達の方へ、俺はラドの方だ）」

「（…了解）」

と、念話で会話し終わると同時に部屋のドアを開けた瞬間、爆音が響き、建物を激しい揺れが襲った。

黒い谷で（後書き）

今日は一段と眠い…。

アドバイス、感想等待っています。

次回、戦闘。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0504n/>

究極の黒き闇と究極の白き闇の散歩

2011年3月6日21時17分発行